山とスキー

第六十四號

札幌 山とスキーの會 發行

大正十五年九月一日發行（毎月一回一日發行）

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十五年八月二十八日印刷納本

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第六十四號目次

記事

登山史上の人々 ―エミール・ジャヴエル小傳― 大島亮吉 〔一〕
富良野岳登攀の思ひ出 赤松勳 〔二五〕
冬季登山と之に應用さるる二、三のスキーテヒニイク 麻生武治 〔二八〕
秩父宮殿下の御登攀の話 廣田生 〔三一〕
彙報抄錄 スキーテクニツクの研究 本田治吉 〔1〕

寫眞版

築造中の北大スキー部記念ヒユツテ 廣田生
Glocknerの連峯 麻生武治

大正十五年九月發行

築造中の北大スキー部記念ヒュッテ　（廣田生）

登山史上の人々（二）

エミール・ジャヴェル小傳

大島亮吉

エミール・ジャヴェル　Émile Javelle（1847—1883）

『既に訪れられ、取り圍まれ、侵入され、所有され、征服され、伐られ、拓かれ、俗化した山々は、尙ほ其れ自らの美を認めて呉れる詩人を待つてゐた……。其れならば、ジャン・ジャック・ルッソオの後、バイロンも、ユウゴオも、ラマルティーヌも其のためには充分その人ではなかつたのか？　確かに、以上の人々は山岳に對して熱情と賞讃とを充分に投げかけてゐる。殊にラマルティーヌに於て最も然りだ。然れど其れ等は低きから望んだ山岳に對してだ。言ひ換えて見れば、其れは小さい山にだ。樅や、或ひは少なくとも落葉松でとり圍まれた牧場のある、高さと云へば、二千米突位ひのものにだ。其れは高山 haute montange ではない。此の二者の間では總べての點が著しく異つてゐる。例へば空氣の性質から、寂莫の程度から、地貌から、其の人に迫る力まで、種々と異なる。そして五十年來私等は大アルプスを詩に歌にまで書いた多くの登山者の努力を目のあたり見て來た。其れ等の詩歌は唯だ小さな、青い山湖のやうに大なる山岳に反映するのみだ。小谿の中の『泊り場』のやうな情けないものだ。或ひは一日二十四時間の極く僅かの時間を頂上に坐つたやうなものだ。其れ程に『山岳文學』la littérature alpestre は貧弱だ。何故ならば、登山者の中には、又其れと同時に文人であ

る人が甚だ尠なかつたのに依るのである。

丁度、其の時ジャヴェルは此の方面の無力寂寥な點を補つて顯はれた。彼れは寺院の尖塔そつくりな、花崗岩の尖つた峯々にとり圍まれてカントン・ドゥ・ヴァレェとの境ひに聳えてゐる、彼のトゥール・ノアールの頂を初めて登攀した。『トゥール・ノアールの初登山』Première ascension du Tour-Noir. と題して彼れのものした此の記文は、アルプスに就いての文學の中でも、最も高く評價されてゐる名文章である。此の他彼れの高山に就いて書いた登山の記述は、既往の山岳文學の中で燦然たるものである。此れ等の高山に於て、彼れが其の美を顯現したと同樣に、彼れは、小さな山々に於ても既に其れは度々詩に歌はれてゐたにも拘はらず、そして其れ等の古詩は最早あはれな近代人の心胸には何等訴へる所のないものであつたのにも拘はらず、尙ほも新しい美の意識を植えつけた。彼れの『アンニヴィエールの谿の八日間』Huit jours dans le val d'Anniviers や『プラン・セリジィエの牧人小屋』Les mazots de Plan-Cerisier などを讀め！ 如何に其處の低い山々と谿々に彼れ自身、自らが自らにまで到着しての獨自なる境地に達して、他の誰れしもの追隨し得ない魅美風韻を觀照してゐることか。』と佛蘭西翰林院會員アンリイ・ボルドオは山岳文學上に於けるエミール・ジャヴェルの地位に就いて以上の如く述べてゐる。（œuvre Posthume Émile Javelle, Souvenirs d'un Alpiniste. 1920. Préface de Henry Bordeaux L'Académie Française. Émile Javelle et la Littérature alpestre. P. 12a13.）其の樣にジャヴェルは固より純然たる登山者であつたが、又彼れの登山に就いてものしたものが、其れ程までに高く評價されてゐる程、彼れは山岳文學上での屈指な立派な文人であつたのである。然し乍ら、エミール・ジャヴェルは彼れの先輩なるユージェーヌ・ランベールよりの感化を蒙ること甚だ大であつたけれど、彼れの著作はランベールの其れとは少しも近似がないのである。彼れは幾つかの彼れのアルプに於けるブロムナードと登山の記錄を、美しい文章を以つて書いた。其れは彼れの死後、其の友なるProfesseur Edouard Béraneck の手に依つて輯められて『一登山者の回想』Souvenir d'un alpiniste なる表題の下に上梓せられた。（第一版は一八八六年ロザンヌで出版され、第二版は同じく一八九二年に、第三版は一八九六年、ユージエーヌ・ランベール

自身のジャヴェルに就いて書いた所の une notice biographique を附されて出て、其の一九二〇年の新版は現時佛蘭西屈指の文豪たるアカデミイ・フランセーズの會員アンリ・ボルドオ Henry Bordeaux の『エミール・ジャヴェルと山岳文學』Émile Javelle et la littérature alpestre なる長論文が序文として加へられてゐる。)

ジャヴェルは熱烈なる登山者であつた。彼れは彼れ自身が山を愛したやうに、又自らが山に愛せられることを希つた。彼れは其のやうに grimpeur passionné であつたと同時に、實に惠まれた、立派な才能を有つた文人であつた。人に依つてはジャヴェルを『山岳文學の父』le père de le littérature alpestre と呼んでゐる。(Henry Bordeaux; OP. cit. P. VI)

ジャヴェルは一八四七年九月六日に南佛蘭西の伊佛國境近く、アルプ・マリティームのヴァロン・ドゥ・ラ・ティネエ (Vallon de la Tinée.) の谿谷にあるサン・エティエンヌ (Saint-Etienne) の町に生れた。其れは小さな、非常に古い町であつた。そして其れは中世紀の古き寺院と古風な僧院の畫の如くにモン・ティニブラの山脈の巖の蔭に在つて、靜かに鐘の音の響く町であつた。三歳の年に彼れの兩親は彼れを連れて巴里に居を移して行つた。勿論巴里のラ・モンターギュ・サン・ジュヌヴィエーヴや、ショウモンの絞首臺等が、此の幼年時代のジャヴェルに強い印銘を與へたではあらうけれど其れよりも尙、後年の彼れをしてしかくなさしめたやうに、自然に對する愛の心を芽生えしめるやうな幸福な機緣と云ふものが其處に存したのであつた。彼れには一人の變り者の叔父があつた。その叔父は植物採集狂とも云ふべき人であつた。其の叔父は屢々ドゥフィネ山塊の高峯モン・ペルヴウやシャモニィの谿谷、グラン・サン・ベルナール峠の山麓や山腹へまでも植物採集に出掛けて行つて、其の採集旅行の土產には必ず幼き彼れの甥なるエミールの爲めに何かと持つて來て呉れた。其れは度重なるに從つて小さな博物館と爲つた。羚羊の角の飾りが附いた杖、ティロール風の背負袋、山人の手になる粗製の木彫細工、澤山の植物標本等が其れであつた。殊に其の植物標本の中に集められた草や花と言ふものは、皆乾からびて、もうすつかり芳香も光澤も無くなつて居るものではあつたけれど、其れ等に叔父が書いて呉れた植物名、註記等が好奇心に富んだ小兒の心に對しては不思議な名前であり珍らしいものであつた。例へば、Androsace..., rochers du

Mont-Blanc. と書かれた此の綴字の魅力が、如何に小さいエミールの判斷力に對しては、神秘な、又朗らかなものと響いたことであらうか？　此の時分のことをジャヴェルは彼れの遺著『一登山者の回想』の中で回顧して、『根の間に尙まだ泥土の附いてゐる――然も其れはモン・ブロンの山体の極少な一部分であるのだが――萎れた其の小さな草花は、決して私にとつては唯だ小兒の玩具ではなかつたのだ』と云ふやうに書いてゐる。Androsace, rochers du Mont-Blanc... 唯だ此れだけの植物標本の註記の中に、エミール・ジャヴェルは彼れの生涯韻律と云ふものを見出したのであつた。彼れは人生の煩事と逆らひ、其の繫縛より逃れんとした。そして唯だ山上に咲く清高な花、アンドロザースを追求することに依つてのみ其れ等に打ち克つたのであつた。總べての彼れの希望、總べての彼れの考想、あらゆる彼れの空想、總べての其等を恰かも軍旗のやうに翳して、彼れは山に向つたのだつた。モン・ブロン山群は彼れの生涯を通じて附き纏ふてゐた。彼れはモン・ブロンとダン・ドュ・ミディを他の何れの山よりも親んだ。其の他彼れは猶ほセルヴァン、ワイスホルン、ウトゥール・ノアールにも赴いた。彼れは彼れの少年時代の實現し得なかつた山岳への愛情を心胸深くに秘めて居たかのやうに、全く他のパッションを打ち棄てゝ、愛着措く能はざる其れ等の山々を愛したのであつた。勿論彼れは生涯かけて誠實に其の山岳への愛を抱いて居た。其處にジャヴェルの生涯の純一さがあるのである。其れを除いての他のものは總べて單なる外部的な還境に過ぎない。然し彼れが實際に山に登るやうに爲つたのは、餘り彼れの生涯の早くからではなかつた。少年時代から青年時代の始めに掛けてジャヴェルの兩親は、エミールの優しい、熱心な、信仰深い性質を觀てとつて、彼れを僧侶に成さうと敎育した。十六歲までジャヴェルは其のやうな敎育を享けたのであつた。然し此の事は彼れの兩親の見誤りであつた。ジャヴェルには神の力よりも山の力の方が强かつた。神學と代るべきものは、峯頂と永遠の岩と雪であつた。彼れは神の敎へを說くべき牧師とはならで『山登りの牧師』(le prêtre de alpinisme) と成つたのである。そうなつた動機と云ふのはジャヴェルの一家に起つた一種の小さな家庭悲劇の爲めであつた。即ちジャヴェルの十六歲の時彼れの父は家運の衰退の爲めに巴里の居を棄て、瑞西のバール (Bale)に赴いて何か良い機會を攫んで衰へし家運を挽回しやうと試みた。

彼れの父はバールで或る若き婦人と再婚し、寫眞のアトリエを構えた。父はエミールを彼れの膝下に呼び寄せた。彼れは其れをきゝ入れてバールにやつて來た。然しジャヴェルは父の新しい職業の「寫眞屋」は手傳つたかも知れないが、彼れの若き繼母を享け入れることは出來なかつたのである或る朝彼れは其處で家出した。そして彼れは瑞西、サヴォア、ドゥフィネを通つて、ドゥフィネ山塊の南、ヴァル・ドゥ・ラ・デュラネエ（Val de la Durance）に沿ふた歴史的に名高いアンブリュン（Embrun）の町に居る遠緣に當る父方の親類を賴つて行かうとしたのであつた。其の時ジャヴェルは十七歳であつた。今や彼れは自由の身であつた。然し彼れの心は甚だしく傷けられて居た。此の時こそ、彼れの亢奮した力をば山へと向はしむる最も良い狀態であつた。ローヌ谿谷のマルチニイ（Martigny）まで、斯くして彼れがやつて來た時、ジャヴェルは急にアンブリュンに行く道程を變えて、峠を越えてサヴォアに入つた。讀者諸君よ、諸君は何故かと其れに就て言ふであらう。ジャヴェルは幼兒の時から憧憬して居た彼のモン・ブロンに初めて挨拶をしようとしたのである。然しジャヴェルは彼れの此の最初に愛する山を眺めた時のことに就ての感激に就ては何も私等に物語らない。

アンブリューンに於ける親類と云ふのも又巴里の植物採集狂の伯父とよく似た人であつたので、快くエミールを其家に置き、彼れを永い間の漂浪的な旅行から落着かせた。然し間もなくエミールは氣を取り直して巴里に暫時滯在した後再びバールの父の家に歸つた。今や瑞西は彼れに對して『第二の故國』と云ふが如きもの、言ひ換えれば『山岳を有する佛蘭西』と爲つたのである。ジャヴェルは彼れの過去を追想して此の時の事に就て次ぎの如く言つてゐる『眞實、私の克ち得なかつた抗し難い魅惑の力は、まさに瑞西の有つ風土であつた。瑞西の國を一度眼に觸れしめ、又其地を唯だ一度旅行したに過ぎなかつたのだが。其の時以來私は絶えず其地に對して想ひを馳せ、地圖を擴げては旅程を空想的に計劃したりなどした。巴里に於て『牧牛の頸鈴の曲』le Ranz des vaches を聽いて、私は瑞西に對して懷しさの餘り熱い涙を思はず滾した』と。想へば此の『頸鈴の音』はジャヴェルの生涯に對しては實に最も價値ある變化を與へしむる尊い動機を起さしむるものと爲つて居るのである。其上若い寫眞師はジャン・ジャック・ルッソウとアレクザンドル・ヴィネーの Profession

5

de foi du vicaire savoyard と『古文選集』chrestomathie とを讀む機會を遇然有つに到つた。此れに依つてジャヴェルは始めて高遠なる思想の世界に其の足を踏み入れるの端緒を開くことに爲つた。そして更らに數年後に彼れは又文字通り山岳の世界へと其の足を踏み入れて行つたのである。ジャヴェルは其の時未だ彼れの淺學なる事を深く耻ぢた。彼れの心胸は學問に對する渴望に依つて深く喰ひ込まれた。彼れは先づ學者たらんと希つた。斯くて彼れは自らを熱心に獨りで敎育し始めた。自らを敎育せんが爲めに彼れは如何に大なる困難をも厭はなかつた。そして實際に彼れは深く學を積む事が出來たのである。寫眞業を棄てゝ彼れはヴヴェーの寄宿學校に於て一八六八年迄佛蘭西語を敎へることにした。然し乍ら彼れは當時未だ羅匈語に練達して居なかつたので、彼れの古典研究に於て常に支障を來たして居た。其處で彼れは其の爲めに佛蘭西語敎授をして居る間絕えず不撓なる、驚くべき努力を拂つた。とは云へジャヴェルは決して不撓不屈な努力を以つて自らを自らの手で築き上げたやうな獨學の上に屢々見る如き一種の自己過信に陷つた傲岸尊大な風と云ふものを少しも有しない極めて溫和にして謙讓卑遜な人格の人であつた。斯くて後ジャヴェルはヴヴェーの Collège de Vevey に於ける名聲ある敎授の椅子を與へられたのであつた。彼れは彼れの講義の爲めには專心總べてを傾倒し、又公開的な講演を爲した。そして新聞にも稿を送つた。彼れはヴヴェーの榮譽であつた。彼れは修辭學の講座を擔任して居た。然し乍ら其の講義は完成されなかつた。ユウジェーヌ・ランベールがジャヴェルに提供した研究こそは彼れが其の敎授職にあつた期間の大部分に於て成した研究であつた。とは、ランベール自身の記して居る所である。アンリイ・ボルドオは此の時代のジャヴェルに就いて記するに、「余は此の當時ジャヴェルが實際に日常用ひて居た備忘用の手帳を幸ひにも所藏して居るが其の中には彼れの考想、講義案、印象の斷片等が詳しく書き込まれて居る。そして其れには又ジャヴェルがハルトマンやスペンサー等當時の碩學の考想よりして導かれた、彼れ獨自の深邃なる哲學的思索の痕を迹り見る事が出來る。」と言つて居る。然しジャヴェルをもつとより大きく、深く敎育したものは其れ等の人々ではなかつた。山岳が彼れを敎育した。『アルプ・シュイッス』の著者ユージェーヌ・ランベールは言つて居る。「ジャヴェルは山岳に對して一個の深き情熱を

有して居た。其故彼れはアルプスの山麓を離れては永く住んで居ることが出來なかつた。山岳は彼れに對して唯一の大なる魅惑であつた。固より彼れは平原の風景の有する一種のシャルムと言ふものをも亦充分に了解するだけに開かれた精神を有して居た。然し彼れの眼には平原の風景は單に唯だ風景であるに止まつた。然るにアルプスの自然は其の形態、現象の多樣さを以つて彼れに對して象徴化された人格的の盡きざる世界を展開したのである。」と。

斯くてヴヴェー大學の助教授ジャヴェルは彼れの敎へた子弟等をして、忽ちに山岳への愛にまで彼れ等を熱中せしめた何故ならば彼れは洵に好く彼れの子弟を愛し、且つ彼れ等に彼れの山岳への愛を說くに當つて最も熱あり、且つ美なる色彩的の言葉を以つて爲したからであつた。殊に彼のダン・デュ・ミディを如何に彼れが愛して居たかと言ふことは、彼れの此の山岳に對しての情熱を旣に彼れ自身『一登山者の回想』の中に屢々挿話的に叙して居る程である事に依つても窺はれるのである。アンリイ・ボルドオはジャヴェルの此の時代に如何に彼れがダン・デュ・ミディに對して深い憧憬を有して居たかと言ふ事を書いて「ジャヴェルは彼れの生涯の中で此のダン・デュ・ミディは幾度となく登つた。或る時は新しい登路を求めて登り、又或る時は季節を異にして登頂した。洵に彼れは此の山を恰かも愛人のやうに愛したのだ。然かも彼れが實際に此の山の頂に立つ迄に、彼れは久しい間此の山を山麓の遠くより憧憬れて眺めて居たのだつた。其れが此のヴヴェー大學の助教授時代であつた。丁度其れは彼れの敎へる學生が敎室の窓から街通りの向側の住宅に毎日顏を現はす若いその家の娘の美しい、生き生きとした顏にぢつと見とれて敎科書をそつちのけにして居たのと全く同じやうに、ヴヴェー大學のブッティ・プロフェッスールたる此のエミール・ジャヴェルは、其の時分、レマンの水光の彼方に聳え見ゆる彼のダン・ドュ・ミディの七つの頂峯の美しい山姿を窓越しに見つめて居ては、好く彼れの生徒の前に居ることを忘れたのであつた。其時彼れは其の窓から彼れの友達を見たのだ。山は彼れに合圖をしたかも知れぬ。又山は彼れに言葉を掛けたかも知れぬ。或る夕暮、レマン湖の彼方に夕陽の沈まんとして、湖面に陰影の深く這ふ時刻、湖上の尙ほ光りの消え殘る水平線に唯だ此の名峰ダン・デュ・ミディの聳ゆるのを彼れは眺めて居た。其の麗美を殘さんとするに就て人は如何とも

7

爲し得ぬ。彼れは此の山姿の美を一度此の當時に於て筆にせんとした。然し次ぎに其れの爲し難きを知つて其の企圖を直ちに放棄した。」と記して居る。此れは唯だジャヴェルの山岳に對する深き愛着のあらはれの一端に過ぎぬ。

既に是迄に書いたことでも察せらるゝ如くジャヴェルは山岳と言ふものに、唯だ一人で、深い、ユニックなアッフェクシオンを運んで居た人である。彼れは閑暇ある毎に彼れの隱棲的なヴヴェー郊外の閑居を出でて、アルプスの深き谿谷の中に、萬年雪の上に、高き岩の頂にと赴いた。そして雨と樹の葉末との書齋の高き玻璃窓を打つ晩秋の夜や窓枠に鹽の如き粉雪の積る夕暮は靜かにちらちら燃ゆる煖爐の前で、又晴れ渡つた秋冬の日は蒼空より降り落ちる日の光りや雪面の明るい外光の射す窓邊で、彼れは一人愉しく過ぎし夏の日の山旅の récit に筆を執りては過ごして居た。斯くて彼れの美はしき『山歩き』の記錄である『二夏の想ひ出』(Souvenirs de deux étés) の如きは、筆者ジャヴェル自身の同稿に附記せるノートに依ると、冬の或る三日間に偶然筆執りては恰かも岩清水の湧き流るゝ如くに一氣に書き上げられたものであつた。そして其れは一八七〇年のレコオ・デ・ザルプ L'echo des Alpes (永き歴史を有てる瑞西山岳會の佛蘭西語を使ふセクシオンのための月刊機關雜誌にして其の第六十年なる一九二四年を以て廢刊せられたり。筆者註) に掲載せられたのであつた。

彼れの登山の最初は、既に前記せる如く、彼の名高き、又彼れの殊の外好く親しんだダン・デュ・ミディ (Dent du Midi) であつた。ヴヴェー (Vevey) 湖畔の町から毎日彼れはラック・シマンの碧い湖面の向ふに聳えて居る此の美しい山姿を眺めて、其れをエレガントな、飾らない態度で、建築に譬へて "le Parthénon des Alpes" と呼んで居た。次いで彼れはヴァレェの山々 les Alpes du Valais とモン・ブロンのマッシィーフに赴いた。又ティンダルの足痕を慕つて、彼れは一八七一年にワイスホルンの登山を爲し、一八七二年には有名なガイドのニコラス・クヌーベル Nicolas Knubel と共に、セルヴァンの初期のアッサンションを決行して居る。其の以前に彼れは度々セルヴァンを試みて居たのであつた。そして其れ等の登山に就いて、彼れは温雅な美はしい筆を費して居る。一八七三年にはツィーナル・ロートホルン Zinal Rothhorn を彼れは登つた。そして一八七六年には、モン・ブロン・マッシィーフのエギィーユの一つであるトゥール・ノアール Tour

Nor（三八二四米突）の山頂を踏んだ最初の者である名譽を得て居る。然れど彼れは決して此のやうな名譽を望んで居たのではない。彼れには山を愛する熱情は高かつたが、彼れの山登りの態度は甚だしく彼れ自身の氣質を表はして、謙讓にそしてコンタンプラティーフであつた。彼れの此のやうな山登りの態度は、後年の登山者の或る者には深い感化を蒙らせて居る。例へば現時瑞西に於ける登山者として、山岳文學者として、また山岳畫家たる彼のアルベール・ゴオの長子として知られたシャルル・ゴオのごときは、彼れの最初の著 Près des Neyés et des Glaciers. Impressions alpestres.（1912）を、全くジャヴェルに公獻してゐるほどである。彼れの山登りの態度、其の風格の一端は、既に『二夏の想ひ出』の書き出しの數行からさへ表はれて居る。

『私は其のことを自ら認めるだらう？　私は唯だ目的もなく山へ行く登山者の一人であり、無益な山岳會員の一人である。

私は Toepffer と Tyndall と Calame と、そして de Saussure とを慕ふ。私は今日まで此れ等の私等が光榮ある先蹤者の誰れもの下に、私自身を置くことは出來なかつたし、又此れ等の人々の流派の何れにも孜々として附き隨ふことも出來ないで、其の一人かち、又他の一人へと引きつけられて居た。そして其の間は、其れ等の人々と私とは遠く隔つて居たのである。實際遠く隔つて居たと私は言はなければならない。牧人の中に居る時や、竈の前に座つてゐる時には、私は彼のテエブェルのシャルマントな錐痕を想ひ浮べる。荒れ古びた、頑丈なシャレエや、嵐の時に根こぎにされた樅の老樹などの光景を眼にした時には、私は彼のカラームの繪を想ふ。氷河の傍らの堆石の上で、私はドウ・ソウシュールを回想した。高い峯を前にしては、私はティンダルやワイレンマンを羨む。そして私は又、其の上私の心胸の内に過ぎ去つた日の或る美はしい想ひ出や、或ひは二三の考想かも知れないやうなものを想ひ浮べてみることがある。然し其の中には勿論何等學問的な觀察もないし、氷河や植物の研究も含まれては居ないし、スケッチ一つさへ無いが、殊によつたら辛うじて、万年雪の傍で摘んだ小さな花の一つか、私の愛して居る峯のプロフィルぐらひが存して居るかも知れない。兎に角、私は全るで死んだ者のやうに、無爲な人間なのである。

然れど、此處で又私は敢えて私のやうな類ひの登山者に宛てて私の書いた、私の此の心からの言葉に就いて、自ら此れだけのことは認める。いや、それは私自身のことを私が言ふのだ。唯だ科學的な、そして有益な或る目的を有つて居る登山者や、山へ濕度計や經緯儀を持つて行く人達だけが、ほんとに、青いクレヴアッスの底を覗いたり、クーロアールを攀ぢたり、高い山頂に立つことを許されて居るのではあるまい。私には多少ことは反對のやうにさへ思はれもする位ひである。

いや、何時でも無學な登山者や、無益な山岳會員諸君、さあ、お出掛けなさい。そして高い頂にあなたの身体を置きなさい。そして後悔もなく歸つてお出なさい。あなたは他にあなたの仕事を有つて居る。あなたは他に、社會的なアクチヴィテを以つて、あなたの務めを爲して居る。遠慮なくあなたの魂を、勞力や苦痛の疲れに依つて、此の大きな自然のエネルジイの中で、鍛へよ！ 休息の時に於て、猶ほあなた達は此んなことに就いて論ずることを望んでは居ないだらうが？

無益な登山者？……否、彼れは決して無益ではない。例へ彼れが如何に微々たる登山を爲して居るにしても、若しも彼れが山へ眞摯な崇敬の眞物を持つて行き、彼れの心を鍛へに行き、そして恐らく彼れの山にもつ了解と愛とを人々に説明し、書き表はすことを知らない人であつたならば。諸君よ、消えかゝつた山徑を辿つて、シャレエの戸を叩く唯だ一人となつてやつて來た誰れにも、又殊に堆石（モレース）を越え、氷河を登つて、高い山頂に攀ぢて來た誰れにも『無益な旅行者』Touriste inutile と言ふ代りに、他か他の名を與へてやつて呉れ給へ！

此の以上のエスプリの中に、即ち永年來私の夏に、秋に、或ひは冬に、獨りで、或ひは私自身の遣り口で、ほんとに後悔なんかなく、何時も新しい悦びを感じて、アルプスを歩き廻つて來たものがあるのだ。』

何んと云ふいゝ書き出しだらう。此れは『二夏の想ひ出』の最初の三頁だ。筆者は只管感じさせられ、動かされるのみだ。筆者は日頃よりジャヴェルの人格（ひとなり）は此の僅か三頁の書き出しの中にすつかり滲み込んで居ると思つて居る。何んと謙虚卑遜の言葉だが、然し又眞率な、且つ力强き言葉であらう。何んと尊敬すべき登山者としての人格の顯現であらう。然し總べて彼れの斯くの如き性情の温和謙讓なるにも拘はらず、彼れの成した登山者としての徑歷は決して當時の敢爲なるパイオニヤの其れに比して劣つては居ないのである。彼れは登山者としても又第一位の人である。ガイドなくして非常な困難な登山も最初にではないが先きに擧げたるものゝ他に爲し、新しく峠も越えて居る。加へて彼れは地質學に造詣深く又氷河の運動をも研究して斯方面に對しての知識は實に該博であつた。然し彼れの床しき謙遜の態度から、此れ等自己の分野以外のことに就て彼れの筆は少しも及んで居ない。又彼れは登山の爲めに決して富力を持つては居なかつた。其の爲め登山の費用を制限すべく考へねばならぬ事が多かつた。然し其れにも拘はらず彼れは多くの登山を爲した。彼れは自ら

重き背嚢を背負ひ、自ら途を求め、硬き岩の上に臥し、自ら食を調へた。そして彼れは登山の計劃に於ても優れた才能を有してゐた。時間の豫測、行路の選擇、特にリーダーとしての責任を完ふする事に於ては、彼れを知り、彼れと行を共にした總べての人々の等しく認めた所であつた。加へて彼れは山岳の多くのセクシオンを創立し、又現に Section de Jaman の最初の支部長ともなつた。ヴァレェはシャンペの魅するやうな彼の美はしい山湖の邊りに建つ『ドルニィの登山小屋』(cabane d' Orny)に登りし人は、此のアルプスに於て最も快適な登山小屋の一つに於ける君が休息の全くジャヴェルの盡力に負ふて居ることを氣付かなくては爲らぬ。然かも此の登山小屋を取り繞るマッシィーフこそジャヴェルの爲めのモニュマンである。彼れは此の山塊の偉大なる開路者である。其處には彼れの名を負ふエギィーユの Aiguille Javelle (Aiguilles dorées の七峯の一) がある。其れは眞に登山者にとりて最も高き光榮ある稱號と見て好いものであらう。

ジャヴェルは死ぬまで山を愛して居た。一八八〇年の夏の登山の間で彼れは胸部を強打して胸部の血管を破つた。其の爲めに最初に發病した時は殆んど快復した。然し大なる登山はもう行なへない程建康は害されて居た。然し其後とても決して彼れは山への愛を棄てやうとは思はなかつた。斯くて彼れは醫者の命に依り一八八二年の夏ヴァレェの彼の嘗て愛して登つた山々の間の村、ザース・フェー (Saas-Fee) やツィーナル(Zinal)へ轉地療養に赴いた。ツィーナル！ 其れは彼のロートホルン、トリフトホルン、ガーベルホルン、ダン・ブランシュなどの峯々でとり圍まれた大なる圈谷の一端にある村ではないか！ そして、ザース・フェー！ 其れはミシャーベル、アルブウベル、アラリンホルンの山麓にある美しい山村ではないか！ 彼れをして此の地に赴かしめた醫者は全く彼れの平常を知らなかつたものか、或ひは迂濶者であつたのだ度々村へは登山者がやつて來た。そしてジャヴェルは村に病後の身を養ひ居ては其の人々の計劃を聞き、又登山の模樣を問ふた。彼れの山への熱情は高まつた。あの人は此の雪のクーロワールから試みたならばどうか？ あの人はあのネェヴェからは行つたらどうか？ と彼れは山を眺めつゝ一人登路を計劃して居た。當時未だ此のマッシィーフは完全に登山者の足痕に依つて究め盡くされては居なかつた。最初の間彼れは助言を與へて居るに止まつたが、終ひに或る登山者の一隊

を新しい登路より導いて共に登山を企てた。然し其の新登路は豫測以上に時間を要して、彼れ等は夜に追ひつかれ、止むなく氷河の上に露營をした。其れは病後のジャヴェルにとつて最も悪い不攝生なことだつた。ザース・フェーに降りて直ちに彼れは再び病床に就いた。病は募つた。咳嗽は激しくなつた。一時肺臓は甚だ危險な狀態となつた。然し病勢稍衰へるに到つて、斯くて彼れはザース・フェーを去らんとして其處よりマットマルク（Matmark）迄難儀して辛ふじて歩行した。マットマルクはモンテ・モロ（Monte Moro）の麓にあつて混沌として荒廢した風景を以つて伊太利と端西のヴァレエを分つ所である。其處はグリムゼルの修道院と共にアルプスで最も不吉な隱遁所の一つである。人は其處に於てダンテの彼の地獄篇の凄慘な光景を轉た想起する程である。此處こそはジャヴェルの最後に訪ふたアルプスの巡禮地であつたのである。ヴヴェーに歸つて彼れは其の冬の間を病床に送つたが、春の再び甦つて來た時にも彼の健康は甦る能はず、一八八三年の四月二十四日、終ひに三十六歳を以て親友知人の浩嘆痛惜裡に於て長逝した。ジャヴェルは死に際して決して彼れの平常の彼の平靜さ、温和さを失はなかつた。恰かも嘗て彼れが彼のトゥール・ノアールの頂に座して靜かに薄暮の陰影が山頂へと這ひ上つて來るのを打ち眺めやつた如く、彼れは病床に臥して極めて平靜に死の暗影の彼れの胸に徐ろに迫り來るのを眺めて居たのであつた。

ジャヴェルには生前著書としての形式に遺されしものは無かつた。彼れの主として『レコオ・デ・ザルプ』誌に載せたアルプスの眞と善と美とを流麗滴るばかりの美はしい名文を以て生かし綴つた紀行の全篇總べては彼れの沒後其の友エドゥアール・ベラネック教授の手に依つて集輯せられ、『一登山者の回想』と題されて一八八六年にロザンヌに於て初版が上梓された。常に敬虔な態度を以て此の登山者にして又卓越せる文人なりしジャヴェルに就て、主として文學上から論じて居るアンリイ・ボルドオは言ふ。——

ジャヴェルのものした作品の中優れたものは總べて『一登山者の回想』の中に收められてある。其れは彼れの書いた年代順に編ん

てあるが、其れは又彼れの漸次に少しづつ進んで行つた文筆の終ひには考想の深邃にして感覺の纖細を極めて居る彼れの彼の如き流麗な筆致に迄達せる其の進歩の過程を見るに洵に都合が好いのである。故に『一登山者の回想』はジャヴェルの總べてが其の中に含蓄されて居るものである。然し乍ら彼れと雖も其の初期に於ては他の山岳文學が文學的に觀て一般に非難酷評せられて居る點と全く同樣に、彼れも又感傷的に誇張せられた自然の美に對する感激の發露は全然此れを免れる事は出來なかつた。彼れには擬人法と頓呼とを濫用した傾向がある。彼れはジョヂュエの如く太陽に話し掛けた。彼れはロンザアルの如く高き岩の上より黑き森を伐る樵夫を叱つた。そして彼れはポッシュエの如く敎壇の高きから人間世界の微少を嘲つた。

然し漸次彼れの斯くの如き贅言多い文体は彼れから消滅して行つた。然らば如何にして彼れは未だ山に行きし事なき人々にまで山の魅力を何等の虛妄なく誇張なく了解せしめたのか？　此れは總べての文人にとりて、否、特にアルプスを歌ふ詩人にとりての重大な問題である。ジャヴェルは此れに對しては唯だ眞摯と率直とを以つて當つた。極めて單純な字句を以て成る彼れが幾つかの金玉の名篇の讀者の魂に傳へる其の影響の根源は洵は以上の二つのものに他ならぬのである。其故彼れの叙述は先づ根本的に時流時好を逐ふ上つ調子な浮華から免れて居る。

次ぎにジャヴェルは彼れの叙述に於ては極めて細心忠實であつた。特にアルプスの美しい山麓の風光を斯の如くに如實に、斯くまでに忠實に描いたものは古來嘗て見ざる所であつて、彼れの『ヴアレエの山村、サルヴアン』Salvan, un village du Valais と『ブラン・セリジイーエの牧場小屋』Les mazots de Plan-Cerisier はいづれも彼れの靜觀的傾向の最も鮮かににじみ出たものであつて其の描寫の精確と筆致の瑰麗とは寔に以て山岳文學の達し得る極點であらう。（ボルドオ「エミール・ジャヴェルと山岳文學」第三章）

右はアンリイ・ボルドオの論文全篇四章三十頁の中第三章冒頭二頁の要領をとつて、山岳文學上詩的散文の典型と謂はれ、玲瓏玉の如き名文章と謳はれて居るエミール・ジャヴェルが文体の最も良き批評と云ひつべきものゝ大体の體裁を讀者が察する便りとしたのであるが、其の原文は斯かる種類の文學の極致であつて、山岳文學上の如何なる傑作にも比肩し得る美しさを具へて居る。先きに擧げた彼れが『生涯の山』なりしダン・デュ・ミディの度重なる登攀遊蹤の後、此の山を精叙した『二夏の想ひ出』Souvenirs de deux étés や彼れが Le Val d' Anniviers, c'est ma, marotte と云ふ具合に書いて居る程其處の風物に魅惑され、生涯愛着措く能はず、屢々其の豁の山村ツィーナルに永き夏日の滯留を爲した或る時の印象記である『アンニヴィエールの豁の八日間』Huit jours dans le val d' Anniviers 等は此れ又總べてアルプスの山麓の

スケッチにして、其の地の國光人情風俗を描いて、何れも絶好の繪畫小品を觀るの思ひがある。そして然も其の叙述には彼れの詩人的の直觀と熱情と、美に對する犀利にして蠱惑的なる眼晴と、而して深邃なる哲學的瞑想とに依りなる落著いた觀照の和やかな韻律の滾々として流れて盡きざる點よりしても、先きにボルドオの擧げた『ヴァレェの山村、サルヴァン』や『ブラン・セルジィーエの牧場小屋』に次ぐべき文學的價値あるものと筆者は自分で思つて居るのである。『一登山者の回想』中に收められたるものは固より以上のものに盡きては居ない。一八七二年の夙きに決行したマッターホルンの登山を敍せる『セルヴァンの登山』Une ascension an Cervin より『ワイスホルンの登山』(一八二一年) Ascension du Weisshorn『ロートホルンの登山』(一八七三年) Ascension du Rothhorn『ダン・デランの登山』(一八——年) Ascension de la Dent-d'Hérens に到る純登山の記錄的なものより、主としてアルプスの前山、山麓の逍遙遊行を叙せる『サランシュの峽谷』Les gorges de la Sallanche『トリアン山塊』Le massif du Trient そして最後には一八七六年に彼れの最初に登りしモン・ブロンのマッシィーフのうちの三八二四mの峻峭なるエギィーユの一つなるトゥール・ノアールの初登山を記したる『トゥール・ノアールの初登山』Première ascension du Tour-Noir に到る迄の長短併せて十一篇の諸篇を收めて居るのである。以上のものも又夫れ夫れに評者の觀る所に依つて文學的の價値は有するであらう。然し筆者は玆では決してジャヴェルの山岳文學的方面を誌さんとするものでない。初めから筆者は之に觸れるの意圖は持つて居ない。唯だ筆者は筆者の日頃其の著書を通じて尊敬する登山者の一人なるエミール・ジャヴェル其の人の「登山者」としての小傳を些か誌さんとて筆執りしのみにて、彼れの文學上の其等の點に關する研究は、無論、此の小傳記の目的でもないし、又佛蘭西人ならぬ、端西人ならぬ、筆者如きが斯かる文學上の見地から彼れの文章を觀味する事も出來ないのであるから其等の問題に關して正當な觀察を行ふことは全然不可能事に屬する。然し乍ら、唯だ、筆者が『一登山者の回想』を三・四年來時たま繙き讀んで得たる彼れの風格に對する或る切實なる感動、又一度び感動を擧げて熟讀した時の忘れ難い感銘が筆者をして更らにジャヴェル其の人に就て今少しく、例令、片鱗にもせよ、己れの觸れ得ただけを誌さしむる事を讀者諸氏は直ちに

ボルドオの言葉の其れの如く『虚妄なるリリィスムに墮せるもの』として強ち斥けないであらう。玆に於て筆者は更らにジャヴェル其の人の登山者としての人格と態度とに就て少しく記してみたいと思ふ。

彼れは『假へ著名な峰にも落着いて登る利己的な占有心のない登山者であり、又唯だ自らの悅びの爲めに氣紛れの儘に山上の高きを歩き廻ることを好むで、適度な熱情を以て其れに沒頭して居る氣樂な登山者』(「トゥール・ノアールの初登山」)であつた。彼れの此の登山の態度なり、傾向なりは彼れの何處にも窺はれる。其の前者の例は彼れが彼の有名なダン・デュ・ミディ、多くの登山者に登られ、又現に多くの登山者の登る彼のダン・デュ・ミディの七つの頂峯を彼の如くに愛して、其處に彼れ自らの獨自なる境地を見出して居る事に依つても充分である。洵に彼れは『二夏の想ひ出』の二篇六十八頁は唯だダン・デュ・ミディを敍するに捧げられたものである。彼れは其れに於て次ぎの如く書いて居る。其れは先に引用した『二夏の想ひ出』の冒頭の三頁に直ちに續く所の數行の章句である。――

『私はアルプスを歩き廻つたと書いた。若しそうであつたら其れは私の思ひ違ひだ。さう云はなければならないのは、アルプス全体ではなくて、ダン・デュ・ミディだ。ラ・ダン・デュ・ミディ。――此れこそ私の愛する山である。幾度か、夏來る毎に私は此の最も名を知られた著名なアルプスの峰へ引き寄せられて行つた。譬へ冬の間から私にはディアブルレ、ポアント・ドルニイ、ブルウル、ドーム、サルヴアンなどへの精細周到な計劃が立てられ夏の來るのを待ち構へて居たのにも拘はらず、此の峰は最も強く私を呼んだ。其れ故何時も夏の初めには私は此の峰の山懷へと一度は歸つて行くのである。』

La Dent du Midi, c'est ma marotte. 或ひは又、Le Val d' Anniviers, c'est ma marotte と云ふ具合に彼れは好くそう書いて居る。數多くの山を彼は登らなかつた。アルプスの廣くを彼れは歩かなかつた。モン・ブラン・マッシィーフミアルプ・ヴァレェイザンヌ (Alpes Valaisannes) とそしてアルプ・ヴォードワーズ (Alpes vaudoise) は彼れの最も親しんだ山々であつた。オーベルランド・ベルノワに就てさへ彼れは餘り知らぬ。其れより東のカントン・ドゥ・グラーリスやカントン・ドゥ・グリソンの山々やティロールの岩山は全然彼れの登山、逍遙の範圍外であつた。どうして彼れが廣く登り、

歩かなかつたと云ふことは主として次ぎのやうな言葉から察することが出來よう。

自ずと私の思ひ出はジャヴェルにまでかへつた。遠く去つた過ぎし日の彼れにまで。私は彼れがいかに度々このサン・ジャンの谷を訪れて、そこの村と山人と、谷の流れと森と草地と、そして谷のうへ高くの雪と岩とに深い親しみをもつてゐたかと云ふことを想ひ起した。彼れの此のやうな行ひは次ぎのやうな彼れの考へより出ててゐたのである。即ち、彼れは彼れの心の心から、彼れ自身がその譬の一つ一つ、地巌の一つ一つさへも見知つてゐるやうな、そしてその岩の一つ一つさへもが、皆多くの愉しさと笑ひと過ぎ去つた日の山登りの懐しい想ひ出をいつも呼び起して吳れるやうな一つの斜面をば、生涯に一つでも得たいと常に希つてゐたのであつた。（シャルル・ゴオ「サン・ジャンの想ひ出」）

此れはジャヴェルより直接に親しく薫陶され、啓發されし事のあるシャルル・ゴオの彼れに就て誌せし所であるが、更らに彼れジャヴェル自らの言ふ所に依れば——

若しも貴君等が自身の力に依つて、一つのよりよき生涯を得んと希ふのならば、私は貴君等に貴君等の其の日常の變化乏しき單なる營みの生活の中へ、他の多くの愛しき想ひと共に時には山上の高き谷々を領して居る其處の深きそして穩かなる平和と、白き峰頂の氣品高き靜謐と、そして尙ほ其上に、終ることなき逍遙遊行と、幾度繰返しても又常に始めてであるかの如き感を與へらるゝやうな登山とに對する強き願望を採り入れなさることを奬めたい。（「ヴアル・ダンニヴイエールの八日間」）

斯くの如くジャヴェルは極く小範圍に自らの登山に逍遙する山なり谿なりを限つて、其處に深い觀照を見出した。此れは彼れの登山者としての態度傾向の最も強き顯現である。ジャヴェルを語る時、人は皆唯だ此の點を強調する。洵に強調しても可なりである。然し又同時に忘るべからざるは彼れが決して唯だに此れだけに止まらなかつたと云ふ事である。彼れ生涯を蔽ふ登出者としての全姿は勿論靜的のものであつた。然し乍ら彼れの其の温和謙遜な登山者的態度の中にも又一脈の純眞にして强烈な登高心が存したのである。恐らく此れ無かりせば、彼れは生涯ダン・デュ・ミディを幾度となく登りル・サレエーヴの山地を彷徨し、ヴァレエの谿々を逍遙して其處の山村の牧歌的風景を愛ほしんだに止まつたであらう。然し彼れはセルヴァン、ワイスホルン、ロートホルン、ダン・デラン、ポアント・ドルニイを登り、トゥール・ノアールル

を初登山した。此れ等は一八七〇年代の當時に於ては譬へ順路より爲すも第一流の登山であつたのである。『瑞西アルプスの文學史と美術史』の共著者の一人なるエドゥワール・ギュイヨンはジャヴェルの此の點に就て言ふに、『ジャヴェルには「遊蹤」"flânerie" と「登攀」"grimperie" との二つのエスプリがあつた。前者は彼れにとつて先天的のものであつたが、後者は後天的であつた。然し乍ら時として後者のエスプリは彼れを火の如く燃燒せしめた』と誌して居る。其のエスプリは次ぎに掲ぐる彼れの筆痕に依つて私等は知ることが出來よう。其れは控へ目な、明快な、然し力の籠つた言葉である。——

『登山者が未だ未知未踏の峰頂を最初に登ることを好むと云ふ理由は、其の峰頂を始めて登ることに依つて彼れ等が一つの征服を成し遂げ、自らの支配の中に新らしい領域を獲得することが出來ると云ふ事である。此れは全く私等人間の本性に深く根ざした本能である。此の事は既に屢々私等登山者の間では述べられた事ではあるが、私も亦斯く信ずる者である。而して此れは決して登山者が自らを他に誇ると云ふ如き意味の爲めに爲されるものではなく、全く自己自らに對してのものである。征服と言へば其れは自らの心中に聳ゆる山の未知の危險に對する恐怖や其れを登る困難に對する勞苦を征服し、堪え忍んだものである。勝利と言へば其れは自らに對しての勝利であつて、山に對する勝利でもなければ、又他の登山者に對する勝利でもない。深くして抗し難き本能に依つて私等人間は絶えず身を引き上げ、登りゆくことを愛す。其故峰がより高ければ高きほど、より眩暈を起さしむるほど急峻なればなるほど、そして其れがより困難なればなるほど、其の峰は登山者の永久に到達し得ぬ理想に近づいて來るのである。此れが、何故登山者は常に秘かにより高き峰か、さもなくば地上に最も關係少なく空間に最も自由に聳えてゐる急峻な細身の峰頂を求めつゝある理由である。或る峰に對して勝利を得た後に於て、登山者は常に其の今はより高く聳えてゐるかの如くに思はるゝ彼の峰に就きて、數時間もいろ〳〵と想ひに沈むことを愛するものだ。—君は未だ嘗て此のやうな事を其の樣な時に於て幾度も感じられたことはないか？ 其時君は次ぎの事を感ずることが出來よう。其處に君の心胸内には其時迄何人の足も未だ其處に置かれなかつたと云ふ山頂を踏む倨傲の單なる滿悅以外の滿悅がある事を。魂の最も奥底から直ちに出て來る、痛切な感動のあることを。其の峰が蒼穹に尊大孤高の姿にて屹立してより數へ能はぬ永き時の間、君以外の何人も未だ其處に來た事はない、君以外の何人も其の山頂よりの展望を其處から得たものはない、劫初以來其處に續いてゐた沈默を破つて君の聲は響いたのだ。又多くの人々の中より危險難苦を越えて君が人間總べての最初の代表者として其の人間未到の地に來たのだと君自らに言つてもいゝ樣に、種々と言ふ事は出來る。其時人に依つては恰も何等

か宗教的の職能を與へられたかの如く感じて、此の大地と人間との交歡の新しき一點を成就した瞬間には何等か崇高な或るものがあると感ずるであらう。如何に感ずるとも其れはよいことだ。ともあれ、アルプスの處女峰の頂ならずとも、オーストラリヤの未開の平原の只中に於ても、人は其の未到の地を踏んだ時何等か深き感動を体驗する事なくしては濟まされぬであらう。

私等の遠き未開な祖先等が、其の當時は鬱蒼たる深き森に蔽はれてゐたが、現在では耕地や都市の擴がつてゐる此の土地を初めて彼れ等の所有と爲した時の事を想ひ浮べてみるに、恐らく彼れ等は此の森のなかの或る高みに登つて自已の所有とすべき土地を涯まで見渡し、そして其の高みの頂に小石の小さい堆積を所有の印として造つたらう。積石（ケールン）（cairn）と呼ぶ其の小石の堆積に對する語が今日尙ほ古きケルトの語形を保有する英國登山者の間に使はれてゐる事こそ其の證左である。斯くて私等も又私等の山の峰頂に最初に登つた時、恐らく此の人の記憶にない古き時代からの傳承に依る本能の一種とも言ふべきものに從つて石を積む。然れば此の私等の爲めに、又私等の祖宗の爲めに積んだ積石は決して個人の自慢の記念物ではない。然し最初に其處に來て、其れを手づから積んだものは、憚りなく次ぎの如く言ひ得るものである。—人間は此處へ來た。以後大地の此の一點も人間の所有だ、と。』（「トゥール・ノアールの初登山」）

とは言へジャヴェルは決して此の方面では其後の登山者には餘り影響を與へる所はない。何故ならばジャヴェルの他の一面即ち flâneric に對しての彼れの態度が餘りに生涯を通じて色濃かつたが故である。筆者が彼れに就て嘗て遙かなる敬慕の一端として捧げ誌したに過ぎない拙ない詩の一節に、其の點に就て恁ふ彼れを書いた。——

おゝ、エミイル・ジャヴェル！
モン・セルヴアンの第七回目の登頂が
あなたの名を永くは記憶させない。
あなたが手づから積み重ねた
トゥール・ノアールの頂の積石（ケールン）が
あなたの初登山を記念して
永久にとゞまりはしない。
アルプ・タランテーズのポアント・ドルニイも

ダン・デュ・ミディのあなたの新しい徑も
ともにあなたの名を深く人々の胸には植えつけはしない。
けれど、あなたの今は無い姿は生きてゐる！
あなたの人格の風は吹いてゐる！

（「エミイル・ジャヴエルに」）

即ち、以上の如くジャヴェルは登山者としての謙虚な人格に於て、其の後至者に對する温かく寛かな心、自然に對する其の熱愛なると共に又一面甚だしく謙讓な態度等其他彼れの穩和にして觀照的なる一種先覺的の登山者的風格に於て私等には永く心に留めらるべきであらう。何故ならば前にも述べた如く彼れには其れが先天的のものであつたからである。又彼れの生涯の經歴を見ても、其の筆になるものを讀みても、充分私等は其の事實を察知するを得るのである。彼れは生來病弱にして、体質また蒲柳情操多感にして、加ふるに稍々心に陰影ありし其の青年時代を有ちしためであらうか、彼れの登山に對する思想が單なる自然讃美、自己陶醉の樂天的思想以上のものを包有せる深き自然觀照の態度を獨り見出してゐた。洵にジャヴェルは時に出でて他と共に交はり、人々を導く事ありと雖も、大体に於ては隱棲瞑想の士で、「社交よりも寧ろ書齋に、讀書よりも寧ろ思索に、好んで其の日を送れる」人であつた。そして閑暇ある毎に彼れは其の居を一人出でて、ジュネーヴの近くはル・サレェーヴの低き岩山に、ダン・デュ・ミディの麓はヴアル・ディツリエの谷に、ヴアレェはローヌの側谷ヴアル・ドゥ・トリヤン、ヴアル・フェッレ、ヴアル・ダントレモン、ヴアッレ・ドウ・バアギユ、更に溯りてはヴアル・デラン、ヴアル・ダンニヴィエールの數々を歩いて、其のアルプス山麓の牧場の風物を悅び、緩き山側に展ける山村の牧歌的風景を愛し、其處に季節のあらゆる情趣を感じては孤獨を友とし、寂寥を伴とした。斯る時に於けるジャヴェルの逍遙者としての靜かなる姿は、得て悉く此れを彼れ自身の筆になる前述せられたる彼の『ヴァレェの山村、サルヴアン』や『ブラン・セリジィーエの牧場小屋』及び『ヴアル・ダンニヴィエールの八日間』等の諸篇に在りて

洵に髣髴たるものである。

其處には冬が峯頂の高きを既に白め、其の麓トリアンの谿の緩き傾斜を有てる草場には放し飼ひされし牝牛等が仔牛を連れつゝ、焦茶色に霜枯れた草場の中に其の年の最後の柔かき喰み草をさがし求めつゝ處々に點々として居る如き晩秋の夕暮を、風と雪と霧の中を横ぎつて、コル・ドゥ・バルムの峠路をトリアンの谿谷へと下りて行くジャヴェルの靜かなる逍遙の姿がある。

夕暮は鍍金されて、穩かにして美はしかつた。加ふるに秋の季節の色彩は樹々、灌木の葉々に到る迄に赤と黄のニュアンスの無限の變化をふり蒔いて居た。そして、然も牧牛の懶うい、靜かなる頸鈴の音に全く總てを四周の風物は諧調して居る其の時、其處草地の高みに腰打ち下して、眼の下ブラン・セルジィーエの牧場小屋を、彼れが二十度も來り訪れた程惑溺的に愛好して居た、un. délicieux petit Paradis と彼れ自らの記したる其の場所を見下し、打ち眺めてゐる彼れの姿を私等は上述の諸篇に依つて彷彿たらしむることが出來るのである。

ジャヴェルは又ランベールの如く晩秋の熱愛者であつた如くである。高き谿上の村々の其の年の葡萄の收獲を終へた後の頃の、然し未だ北風の凶凶しき霜を播かぬうち、彼れは此の地ブラン・セルジィーエを殊に好み、其の夕暮や枯れし葡萄蔓の下ゆく夕風の最後の嗟嘆、或ひは季節の最初の雪を戴く山の端を薔薇色に照り映える逝く年の光りに、好んで己れの魂を托した。そして彼れは恐らく其れ等の時に於て何等か他の者の決して感得し得ぬ、單なる一風景に對しての深き觀照の魅力を一人感享しつゝあつたのであらう。

默しつゝ、恰かも夢みる心持にて、緩き歩みもて彼れは細き徑を辿る。質素なる平常の家居其儘の衣服を纏ひ、唯だ靴のみ『山履き』の其れを穿ちたる彼れが丈高く、細き姿、無造作に髭鬚は深く頰から顎に温顔を蔽ひて、眼は澄みて空色なる彼れが姿を思ひ給へ。徑は落葉松の林を過ぎ、潺湲たる小さき谿川を渡り、牧場の草の中に紛れ消える。斯くて、行きゆきて、彼れはサン・ジャンの小村の上の草場なるこある丘の上に座した。眼下なる村とは、僅かの古びて、黝ずみた

る小さきシャレエの緑色の中に埋もれたる一塊りである。然し其處よりは牛の頸鈴の音と其の啼聲とそして子供等の叫び聲が賑やかに上つて來る。村は今は生の夏である。そして時刻は正に太陽が子午線を下る透明な逆光の時。其の夏の午後の日光は餘りに金色に過ぎるのか、彼れは眉間に深い皺を寄せ、どつしり片肘突いて斜めに身を横へて啣えたパイプを右手に持ち添へて草の上に座してゐる。先刻の高き万年雪のほとりに咲いたゲルダネラの芳香に浸みた彼れの衣服は今は又かぐはしき青草の香と微かな其の濕り氣を吸つてゐる。洵に風景は見る眼に依りて一變する。此れ等の時こそ……とシャルル・ゴオは彼れに就て言ふ——Ces moments-là, Javelle eût goûtés l'âme passive de la Montagne. ——ジャヴェルは山岳の有するパッシィヴな心情と言ふものを味感したのであつた。

『サルヴァンの村』ヴァレエの山村の中で最も彼れの愛した村の一つは其れであつた。彼れは其處を愛した。其處に彼れは幾多の美はしき山旅の回想を持つたが故に。其處には彼れは氣立良き村人の蔑人を心安い知己として居たが故に。其處の黎明は山上の牧場へと出掛けて行く山羊飼ひが合圖に吹き鳴らす角笛に依つて眼覺めしめられた。簡素な、床しい、古い風俗が未だ穩かな、全く牧歌的な山村には嚴然と殘つて居た。村の眞中を快活にそして清新に流れゆく小川にしつらへた洗濯場にせつせと洗ひ物に忙しい村の乙女等の風情。白堊の壁の白く輝いた鐘樓より往昔乍らの古風な響を傳える寺院の鐘の音。其の村へと—夕暮時羊飼ひの若者達も山から降りて來る時分、又其處には夕映えるトゥール・サリエールの峯影の下を淡紫に暮れなづんだ谿の村へと、閑かに花咲き、草繁き細徑を辿りつゝ降りて來る彼れの姿があるのである。其の時村のシャレエは星疎らな夕空に半陰影に浮き出し、其の各々の家の家畜小屋からは家畜等の悦ばしい騒音が、子供等のすき透つた叫び聲と一緒に村の夕暮を元氣付ける。薄闇の村路には山歸りの若者等と野良歸りの娘等との明るい夕べの挨拶とがとり交される。黒びたシャレエの太い窓緣の中より輝き初めた赤い一片の燈火。其れこそ今宵の彼れが安らかなやどりであらう。斯くて屢々彼れの山旅の歸途は、此の愛すべきヴァレエの山村サルヴァンに留まる事に依つて完きものと爲されたのであつた。

斯くの如くジャヴェルが田園詩的なる叙景を主とせる美文たる前掲の諸篇中に亘つて點綴せられたる flâneur としての姿を拾ひ求め集めては寔に限りないものである。然して彼れの叙したる val d'Illiez や val de Trient 及び val d'Anniviers の谿々の魅美なる其れ等アルプス山麓の風景事物は、此れ皆吾人の心を彼の地へと誘ふて止まぬものである。谿の斜面一面に段々となつた葡萄畑の實の熟せる頃の其れ等の谿々の村々の收獲時の忙しさと悅ばしさ。其の夏の生々とした村の生活と冬の物靜かな生活、又皆美はしき彼れの叙述に依つて生々と如實に吾人にまで傳へられる。即ち高き氷雪の峯頂、万年雪厚き雪原よりも、其れ以下の、即ち雪線以下の山腹、谿谷、氷河の末舌より下の青き牧場、花咲く草原、小屋、乾酪磊々たる岩石地と其の間を點綴して居るシャレエと呼ばるゝ牧場小屋、Mazot なる方言で呼ばるゝ葡萄の實を絞る特別な作りの小屋、羊腸曲折の峠道、扨ては白き寺院の光塔を有つた村、氷河より流れる濁水の谿川、黑き樅の森、明るき落葉松の林、家畜の頸鈴の音、牧人の歌聲等總べて所謂 Préalpes の風景の描寫に依つて、充分にジャヴェル其の人の flâneur としての全姿を窺ふに足るものがある事と認めるのである。然し如上の彼れに就ての片影固より其れを傳ふるに當つては何等のよすがとも爲らぬ事であらう。

とは言へ以上エミール・ジャヴェルの其の生涯、登山經歷、文献、性格等に亘りて些かなりとも意を止めて爲したる記述に依つて恐らくエミール・ジャヴェル其の人の登山者としての生涯と經歷とを傳えるには或ひは先づ以て現在は充分であるかも知れぬが、然し乍ら彼れ自身の登山者としの內面的な容姿を傳えるには甚だ不充分である事は筆者自身の既に充分此れを認むる所である。然し人に依つては以上の如き簡單な斷片的記述だけに依つても多少ジャヴェルの登山者としての姿と、人としての彼れの憧憬と苦腦と精進とを窺知し、以つて此の登山史上に於ける一先覺の風貌を髣髴する事が出來ると思ふ。筆者は始め直接彼れ自身の筆になるものを讀みて、彼れを知りしには非ずして、實際上彼れの後繼者たるの觀ある彼のシャルル・ゴオの著 Près des Neves et des Glaciers の中の諸所に散見せる彼れの敬慕に堪えざる風格に關するものを讀んで以て彼れに親しみ始めた。そして彼れの遺著 Souvenirs d'un Alpiniste に接するに及んで愈々彼れは筆者

の心の生活に喰ひ入つて來た。然し筆者はもとより未だ充分彼れの山に對してのエスプリに就いて、其れを心感し得ぬ。故に務めて其れに就て筆を及ぼすを避けた。そは、即ち、筆者自身の内心には尚ほ他日相當の程度迄彼れを知り、彼れの文章を味讀し、彼れのエスプリを心讀し得る時——其の樣な時のいち早く來たらん事を筆者は切に希ふが——を俟つて別に稿を起したいとも思ふ顧慮ありしがためである。然し乍ら多少筆の其れに及んでゐる事を稿半ばにして認めたが、敢へて削除する程もなしと思ひて其儘に爲して置いた。而も初め、筆者の目的はジャヴェルに就ての『登山史』上の一連鎖としての小傳を記する一事であつたのである。故に唯だ其の爲めのみに於て多少彼れの登山者としての生涯を傳え得たのは些か以て滿足とする所である。（此稿完）

筆者附記。 此の小稿中主としてエミール・ジャヴェルの生涯を傳える爲めには、Souvenirs d' un Alpiniste の一九二〇年新版 (Libraire Payot & Cie, Lausanne et Paris 發行) の Henry Bordeaux の序文 Émile Javelle et la littérature alpestre に依據しました。此れよりも同じく Souvenirs d' un Alpiniste の第三版一八九六年發行のものには彼れの師友たる Eugène Rambert の自ら記したる une notice biographique が附されてあつて、其れの方がよりジャヴェルの傳記に就ては詳細なるものがあるであらうと思ふが、遺憾乍ら同著第三版は絶版容易に無き稀書となつてゐて、筆者未だ入手せざるを以て止むなく前記アンリ・ボルドオの記する所に依りました。他には其れより詳細なる彼れの生涯を傳えるものは未だ筆者は可成り意を留めて居りますが、無い樣です。

アンリ・ボルドオの其れに次ぐものは Gustave Bettex et Edouard Guillon: Les Alpes Suisses dans la Littérature et dans l' Art. (1915. Lausanne, Librairie F. Rouge & Cie) の第六章 Les Alpes dans la littérature nationale の第二節 Suisse romande の部に於ける一項として、ジャヴェルの簡單なる小傳と其の著者に就ての紹介批評があります。實に要を得たる記述のものであると思ひます。

W. A. B. Coolidge: The Alps in Nature and History 1908 第十章 Modern Mountaineering in the High Alps には僅か三行しかジャヴェルに就て費されて居らないのは悲觀です。此の他には殆んど名を擧げてある位ひのものしか未だ知りません。ジャヴェルの沒せる直後の L'echs des Alpes 誌には恐らく Nécrologie として彼れの小傳も掲載せられてある事でせうが、到底一八八三年頃の同誌などは入手し難いがら日本に居ては知る事は出來ません。

Souvenirs d'un Alpiniste の英譯が Alpine Memories (Trans. by W. H. Chesson. Published T. Fisher Unwin. 1899) な書名で

出版されて居る事は知つて居ますが、未だ入手しません。Harold Spender: In Praise of Switzerland (1912) には同英譯書よりの引用があります。Premiere ascension du Tour-Noir の中から引用したもので、拙稿同所引用文の前半と同個所であります。

ジャヴエルを間接に讀むのには、既に本文中にも引用した如く、Charles Gos: Prés des Névés et des Glaciers Impressions Alpestres 1912 (Paris, Librairie Fischbacher) は最も適した唯一のものであらうと思ひます。

此の他ジャヴエルに關したもので主なるものは現在筆者の知識では殆ど無い樣です。

邦譯では筆者の試みた拙譯の二、三があります。何れも短かき抄譯、部分譯に過ぎぬもので、又大部分本文中に引用しました。但し本稿に引用なきシャルル・ゴオの彼れに關しての一章 In Memoriam の譯章は嘗て「山とスキー」誌第四十二號（大正十三年十月）に掲載せられました。

以上蛇足乍らジャヴエルに就て少しても興味を持たるゝ御方の爲めにと若干の顧慮を加へて附記した次第であります。

暑熱。こんな言葉は、今年の夏を北海道で過ごして居る吾々にはとんと、眞味が解せられない。それ程に北海道の今年の夏は涼しい。

夏休。學生初め務の日暮しをして居るものにとつて、是以上の價値あるものはない。万金の財、不勞の身分、そんなものには本當の此夏休みの有難味が判るものでない。

友は支那に旅寐の枕を求めて今奉天の地に在り。北千島の一角に居を定め孤島の山陵に極光の壯觀を眺めつゝある友亦あり。

居を轉ぜざれども、山に、海に、無聊を慰し、尙且つ記念出版の筆を進むる友あり。學生ならでは、夏休みならでは の感一入深し。

七月中旬突然新聞紙上にて、フオン・レルヒ氏の悲境の報を知る。全日本のスキー家たる人達、自己の功利を棄てて、同情の一端を表示すべきではあるまいか。直接、間接の氏との關係など、此際問題とすべきであるまい。聞けば寄金募集中の由、勸誘者も被勸誘者も日頃の個人の利害關係にとらわれたる行動に出づるは余りに大人氣がない。吾等は大それたことは出來なく共、心からの同情を寄せたいものである。

（八、二〇君）

富良野岳登攀の思ひ出

赤松　勳

眠むりかけた札幌の停車場のポーチに重いスキー靴が鳴りを生じ、又ピッケルが火の出る樣な音を立てゝ仲間の杖となつてゐた。皆の胸には云ひしれぬ興奮があつた。

時は一昨年の二月の初めの僅かの休暇を利用して十勝岳に連なる富良野岳（一九一二米）にスキー登攀の刻印を附けんとして八人のメンバーが揃つたのであつた。阿部、赤松、安積、宮澤、小川、小野、田中、寺田のメンバーであつた。

夜の十二時すぎの汽車で札幌を立つた。

凍れる夜の靜けさの中に數回の乘換へを余儀なくされ、終に上富良野の停車場に着いたのは朝の七時であつた。此處で牧野、瀧田、祖父江等の十勝岳の雪を享樂せんとする仲間と分れた。

TやMやK等は馬橇を傭ふために町をさがし廻り、やつと三十分程して一臺の馬橇を見出した。それに重いルックを橋野農場まで運んで貰ふことにした。頑張る連中は初めはルックを脊負つて行くと云ふ樣な話も出たが結局明日のために餘計のエナージーを消耗するは不利としてかくなつたのである。仲間のものはスキーを携へて馬橇と別れて雪路を戯談しながら町を離れんとする時に『オーイ、オーイ』と呼ぶものがあるので振返つて見ると元氣のよい老人が我等を呼んで居るのであつた。立ち停まつて老人の來るのを待つてゐると此の老人は橋野農場の場主であつた。僕等の來るのを待つて居たが余りに寒いのと我等の來るのが遲いので、主人の出入してゐる或る店で一杯温い奴をひつかけてゐたと云つて顏に微醺を帶びて居る。仲々痛快なお爺

さんだ。

それから僕達はスキーを穿いて起伏した小さい岡を登つたり滑つたりしてゐるとそこへ老人はついて來た。

いくら止めてもついて來た。『なに雪路の三里や四里にへこたれる程もうろくはせん』と豪語して殊に酒の力をかりてあたるべからざる勢であるので仲間のものが返つてまいつて終つて頼む樣に云つてスキー道から離れて普通の道路を歩いてもらふことにした。丁度、やつこ凧の樣な格構をして道を走つて來る。元氣のよい事は壯者をしのぐ勢だつた。農場の事務所へは十二時頃についた。富良野岳がよく見へる。事務所では僕達のために準備が整へられて居た。温かいコーヒーを御馳走になつて明日登らんとする富良野岳へラッセルをつけに皆んなが出かける。晴れ渡つた空に山嶺がぎら〳〵と輝いて長い長い裾野を南の方に引いて居る。麓にはタンネが眞黒に繁つてゐる。

橋野農場から森農場までが約一里ある。だら〳〵登りの道である。それから山麓の森林帶までが約二十町ほどある富良野岳と標高一六二四米の尾根との鞍部へとコースをとつて森の中にラッセルをつける。雪が非常によく、よくしまつてゐるので僕達の行動はづん〳〵進み等高線九〇〇米のところ位まで道をつけたので歸ることにした。そしてそれまでつけたラッセルの跡を仲間が一列に並らんでジックザックに登つたスキー路をスラロームで農場へと滑りおりた。スキーは何等の抵抗もない樣に滑つた。雪煙はたつ。山麓の「やまご」の一團は仲間の下降を驚異を以て眺め歡聲をあげてゐた。事務所では僕等のために風呂が沸いてゐた。皆風呂に浴してのんびりとした氣分になつた時、酒盛りが始まつた。僕達に對する歡迎の宴であつた。大いに食ふ。主人は可成飲める人であつた樣だが仲間が明日の登攀をひかへてゐるから、飲める連中のOやK等は大分生つぱを飲込んだ樣であつたが皆がひかへてゐるので主人は物足りぬ顏をしてゐた。

沈默の夜は明けた。月に輪がかゝつて大地は朧に見え少しく雪が降つてゐた。

第二日の朝四時五〇分に準備を整へて二つのラテルネの光に導かれて昨日作つて居いたスキー路をたどつて行くに隨ひ、朧の天地はだんだん〳〵と黎明の光とかわつて來てラテルネの光を要せぬに到つた時は、森農場を少しく過ぎ

た地點であつた。昨日つけて居つたコースの終點へは七時に達した。富良野岳と一六二四米の山との間に介在する澤を左にとりて登ると富良野岳より走つてゐる尾根は美しく白衣をまとふた針葉樹が並列してゐる。鞍部へ出たのは十時前であつた。時折トウヤウスベ山の方から吹雪が吹いて來たがそれも僅かの間であつた。此のあたりの樹林は實に美しい。雪も非常によい。葉や幹の見えぬほどに雪をかぶつたタンネは神秘を秘めて居る。それは人間では創造の出來ぬ美だ。こんなところをパラダイスとも稱すべき神境だ。スプールの刻みをつけるだに傷しい感じがした。無林帶とかわつてからは割合雪が硬くなつて來た。スキーを穿いて行けぬこともなかつたがそれよりクリーバーを用ひた方が有効の樣に考へられたから一四〇〇米あたりにスキーデポットを作つた。ピッケルとクリーバーで進んだが、ピッケルを用ひたくとも青氷に遭遇もせずピッケルは終にストックの代用にまで成り下つた。殊に瑞西から來たシエンクのピッケルは泣いてゐた。山頂へは十二時半についた。

下層の俗界は雲海で蓋をせられ地球の美しい部分のみが見へる。北海道で威張つてゐる山岳は擧つて一望の中にあつた。此日我等の仲間の活動してゐる夕張岳も又手近く隣あはせの十勝の雪を享樂してゐる仲間も人間の眼がもすこし完全だつたら見へたであらう。

下降は一時、大体登路に依つたが中途より澤傳ひに滑走。三時四十分頃に農場の事務所へ着いた。

主人は愉快にむかへられた。聞けば僕等が樹林帶を出る頃から望遠鏡で眺めて居たそうであつた。

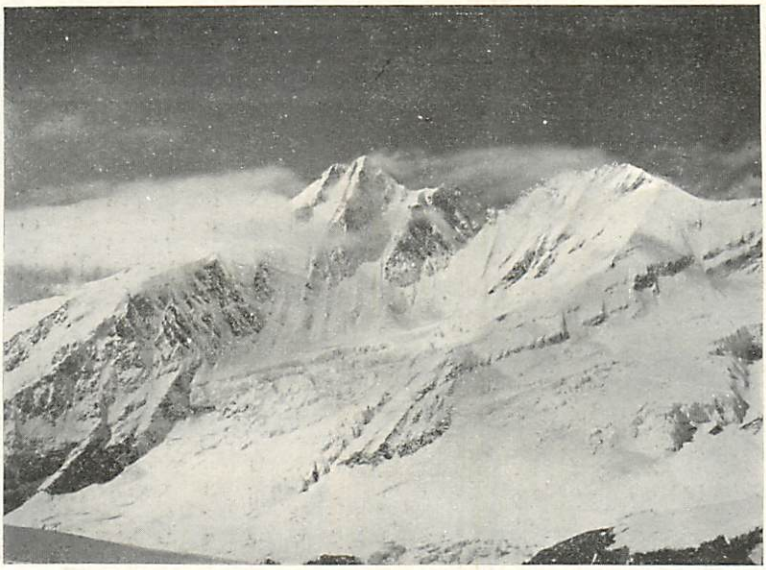
冬季登山と之に應用さるる二・三のスキーテヒニイク

麻生武治

どうせ俗物の多い世の中だが、一寸かけだしにグリンデルワルドあたりへやつて來て Finsteraarhorn に登つたからつて、四〇〇〇米以上の岩登りを云々したり、例の、Mittellegigrat の初登攀以來、日本人のかなりのうぬぼれ屋が輩出した。中には Alpinismus の何たるかもわきまへず、Trift から Ob. Gabelhorn を何時間で往復したの、Matterhorn のぞの Grat は日本人として、俺が初めてだつたなんて、隨分下作なことを云ふ人も出てくる。ベルンに居る帝國公使の名は知られて居ないでも、有恒、槇は瑞西中通つてゐる。俄か仕立の山登り屋の多くなつたのには槇さんも片腹いたく思つて居られるだらう。

冬季登山なんて云ふと一寸大げさにも聞えるが、ツェルマットからの Breithorn なんか標高こそ四〇〇〇米だが云ふ程の山ではない。Monte Rosa の Dufourspitze になると標高は、瑞西一とあるし遠いことも遠い。かなり急なグレッチャーの傾斜がある。其でも Sattel までは、さして登降とも困難はない。Sattel から Dufourspitze までの氷の Grat が、技術を要するといふより寒さ（我々は二月二十六日に登つた）の爲、可成り夏とは異つて（八月卅一日、一九二四年）酸素の少いことで苦しんだ。Gaas の谷に入る Stalden からの路は我々にはほんとうに印象の深いものだつた。寒月のさへた夜路を二人は無言で歩きました。

或は落葉松の木立をぬけ、或はタンネの森をぬつて Fee



Glockner の連峰

（麻生武治寫）

についたのはもう、最夜中を過ぎてゐたらう。鼻先のつまつたツェルマットの町に比べて此處は Feegletscher が開展し、Dom や Täschhorn がツェルマットからとは違つて、ずつと凄く月明に其をうかがわれた。

ダボスの競技以來、友達になつた S. C. Allalin の Jmseng が、氣をきかせて翌日は日曜であつたが、我々の爲に食糧なんかの世話もやいてくれて、前夜の寢不足も忘れて日曜の午後には、三〇〇〇米を越した處に作られたブリタニアヒュッテに泊ることが出來た。

此小屋の生活は我々には、今迄にも稀な心よいものであつた。吾々三人の外にチュウリッヒの Akademische Alpen Club の連中が五人來て居て、山々のヨーデルン（歌）や瑞西ののどかな讃美の歌が夜毎に唱はれた。そして三日の後には、吾々は吾々の登攀の日記の中にもう二つの四〇〇〇米を書き入れることになつた。それはストラアルホルンミアラアリンホルンとであつた。

此二つの登攀で我々は本當に三人氣持のあつた者同志でグレッチアーのザイルファーレンといふものを修得した。同じ山岳滑走でも、瑞西のテヒニイクと、チロールのとでは相異がある。云はばスキー滑走のテヒニイクが違ふとも云へる。Schuss Fahrt からしてが、瑞西にはテレマーク屈膝法が行はれ、チロールでは絶對にホッケである。

後日シュナイデルと Silvretta に入つた時、彼もテレマークは感心して居なかつた。今自分は此處に、吾々自身にはほんとうに意義のあつた登攀であつたにしても、聞く人達にはあんまりかけはなれた、そして今更事新らしいことでもない。たゞへ四〇〇〇米ゞはいへ、之等の山旅について書かうともしないし述べたくもない。

山旅なんてものは唯自分自身の爲のものであつて、講演や雜誌の種ぢやないんだから、心に繪を畫いて居ればいゝんだ。唯其時の冬の登山のスキーゞそして、それにつけ加へての少しばかりのテヒニイクにわたつて書いて、故國にあつて同じ道を樂しむ人達への贈與ともなれば自分の務はたりるのである。

先づ Schuss Fahrt について云ふならば、ホッケもテレマーク屈膝も必要だと思ふ。

ホッケは左右に強いが前後には、テレマーク姿勢には及ばない。後者の左右に弱いといふことが、相當な目方のルックサックを背負ふての、山岳滑走には適さない。而して第二段に云はむとするスヴングをする爲に体重を起さねばならぬ不都合がある。そのスヴングとは無論ステムクリスチアニアであることは、言を俟たない。たゞテレマーク屈膝の前後に強いと云ふことが、雪質の變化に對して強味であることはたしかである。

扨てスヴングは無論ステムクリスチアニアであると云つたが、日本で云つて居らるゝ L.S.T. が何であるかははつきり知らない自分は、潜越であるが、イギリス人どもの所謂 "Lifted Stemming Turn" であるならば、それと私が今此處に云ふステムクリスチアニアとは少し違ふことを述べさせ給へ。

"Lifted" とは、獨語で "Heben" といふことだらう。先づステムしてから、その脚へ体重をうつして、他の脚を beiziehen (引寄せるとでも云ふ?) するのであつて beisetzen するのではないとは、シュナイデルはじめ獨墺チロールの連中がやかましく云ふ處である。今云ふとほり beiziehen するのであつて beisetzen するのではないとなると "Lifted" とは意味をなさないんではないか、ステムクリスチアニアには少しも体重を持ち上げる動作はない筈だ。あるとすれば非常に不安定になる。腰の廻轉(ひねり)によつて此スヴングは支配されるのである。つまりステムクリスチアニアは安定度(スタビリティ)の強いこと〻狹い地帶で早く廻轉出來る處に長所があるのだ。こんなことは今更云ふまでもないことで、ファンク氏がシュナイデルを稱讃する故も此處にあるのだ。日本に必要のないグレッチアーのザイル滑降については云ふのはむしろ氣障だからはぶく。

瑞西での旅にはフュゥーラアーがあつた。グロックネルはフュゥーラアーなしであつた。Kapitain Finch に云はせるとなんだフュゥラアーと一緒の山登りにピッケルなんか不要だ

お客は羚羊の角のついた散策用の杖でも持つてれば事たりると、なる程かけ出しの山登り屋が身の程も知らないで Schenk爺さんにピッケルをあつらへるなんか全く氣障だ。

フインチと云へば、ヒマラヤの草分けをした人、歐洲では東アルペンからシャモニイまで案内者なしで登る男だ。

その云ふことに間違ひはない。だから冬の瑞西の旅にピッケルなんか持つて行かなかつた。そして事が足りた。さて此グロッケネルを馬鹿にしてかゝつた譯ではないが、ピッケルを持つて居なかつた。案内者の居た時はそれで良かつたが、さて此グロッケネルでは、自分が友の Hugo を援けねばならない立場だ。三六四五米の Adlersruhe から頂までスキーは使へない。小グロッケネルと大グロッケネルとの間の凹みは急だ。その上新雪の下層は氷だ。ピッケルを持たぬ自分がどうして友を完全にすることが出來よう。そんな不安な思をしたことは今迄にない。

此スキーの山旅に自分達二人は、アザラシの皮をつかわなかつた。之にも色々議論や批評はあらうが、兎に角雪質に適應して正しいワックスを用ふれば一〇〇〇米以上も登路があつても荷物があつたとて困難を感じなかつたことを告げて筆を擱く。

寫眞說明

Oberwalderhütte より見たる Glockner 群峯

正面 Gross-Glockner 3798 mtm より右へ glocknerkamm と Glocknerwand.

秩父宮殿下の御登攀の話

廣田生

已に新聞に八月下旬毎日の樣に報導されて居た樣に秩父宮樣は無事に今夏の端西の山々の御登山計畫を終らせ給ふたやうであります。私供は本當に歡喜に堪えません。

此處に本當の確たる御旅程は手にして居りませんが、最近松方さんからのお便りと、大毎及び東朝に發表されたところとを綜合して御行程の一端を御紹介申します。

今春の御登山は Finsteraarhorn の隣りの Finsteraar——Rothhorn に御登りになつて、それから Oberaarjoch の方へのグレッチアー旅行をなされたらしいのであります。Oberaarjoch は Oberaarhorn のもう少し東北に當つて居ります。

今夏の御登山についての山々の大体のスケッチを入れて見ました。勿論ほんの單簡な位置方向を示すに過ぎません例の Matterhorn の方はずつと南の方になります。

今夏の御登山計畫に當つて、一つ、二つ面白い話があり

ますから此處に御紹介しました。

宮樣の御案内人選定についてこんな話があつた相であります。こんどの夏のスウィスでの殿下の御登山について、山登りの事はアルパインクラブ(英國)に聞けといふ譯で、殿下の方からアルパインクラブに使者が立つことになつた由。所でアルパインクラブでは山の方にも詳しくて、日本の事情にも明い人物としてウエストン(Weston)老人を推薦して、万事此「お坊さん」に御相談さるゝが良からうと御返事申し上げたのであります。

するとウエストン老人は、聞けばヘル、槇が今歐羅巴に來て居るつて話ぢやないか、そんなら何は兎もあれヘル、マキを呼ぶに如くはないといふ譯で、槇さんがロンドンに呼び寄せられて、結局万事殿下の登山の爲に準備や計畫をすることになつたといふのである。要するに日本の槇さんが、英國のアルパインクラブの推薦で殿下の御供になつたといふのである。

もう一つ。

此大エキスペディションの御準備品の二、三について、かうゆう話がある。

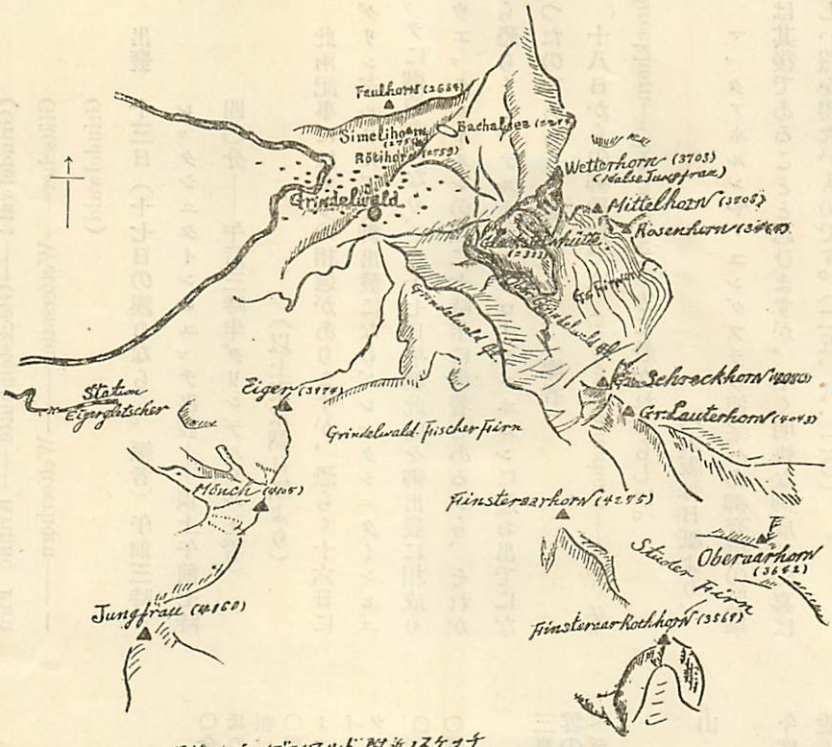
活動は Cap. Noel の使用したシンクレシャーのもの、着物は、シャックルトンなどの使つたバーベリーのもの、カメラは矢張り Noel の使つた三段のぴの Una。曰く何々。ザイルも絹製のもので金£60也の百呎のもの、まるでザイルから五光でもさし相で、ザイルにつながつて Sicherung をやつても、心が落つきまいと思はれます。これでマッタアホルンの肩からツェルマットの谷へ落つこちねば良いがと思つて居ります。樣するに絹ザイルにつながるのは、その値段の高いことで眼のくらむやうなことの氣づかひのない殿下と、物はチット落ちても兎に角絹のザイルをつかつたことのあるヘル、マキ及びその他のフユッラアーと私といふことになります。とは松方三郎さんの御便りの一端です。

八月十三日 Faulhörner——ファウルホルン連峯御登攀、

行程、グリンデルワルド——バッハゼー——ファルホルン——ジメリホルン——レチホルン——グリンデルワルド (Grindelwald——Bachsee——Faulhorn——Simelihorn——Rätihorn——Grindelwald.)

一行 宮殿下、槇氏、松方氏、松本氏、渡邊氏、

案内者 ブラヴアンド、ストィリ、



見渡ナグリンデルワルド附近ノスケッチ
註 • Wetterhorn ; Sattel
× Kriwa Firn Gletscher

天候　快晴　（以上東京朝日紙より）

出發　午前八時十分

八月十七日　Wetterhörner——ウエッテルホルンの連峯御登攀

行程　（グリンデルワルド——ウエッテルホルン（ハスレ・ユングフラウ）——ミッテルホルン——ローゼンホルン——グリンデルワルド）（Grindelwald——Wetterhorn (Haslejüngfrau) ——Mittelhorn——Rosenhorn——Grindelwald）

出發　十七日午前五時

（以上大阪毎日紙より）

行程　（グリンデルワルド——グレックシュタインヒュッテ——ウエッテルザッテル——クリネ・フヒルネ・グレッチアーウエッテホルン頂——歸還往路）

(Grindelwald ——Gleckstein hütte —— Krinne Firn Glätscher——Wettersattel——Wetteerhorn——Grindelwald)

出發　十三日（十七日の誤りならん。編者）午前三時グレックシュタインヒュッテ出發——頂上午前七時四〇分——午后三時半グリンデルワルド着）

（以上東京朝日紙より）

此兩記事には多少の相違がありますが、恐らく十六日にグリンデルワルドを御出發になりグレックシュタインヒュッテに御泊りになり、翌十七日早朝此處を御出發に相成りウエッテルホルンの頂に七時半に御着とあるから、それから恐らくミッテルホルン、ローゼンホルンに迄お出でになつたのであらうと思はれます。（編者）

十八日からの御豫定では Grosses Lauterhorn——Gr. Schreckhorn—Oberaarhorn の方に赴かれるらしい。

（大阪毎日紙より）

マッタアホルンや・ユングフラウ連峯への御登攀の壯擧は其後であることと思ひますが、早く明快な御成功の喜ばしい報を得たいものです。（二五、八、二〇）

彙報抄錄

全日本スキー聯盟近事

○全日本スキー聯盟は去る二月八日理學博士木原均、今泉剛一氏の盡力により國際スキー聯盟加入申込手續中の處、負擔金全額已に納付濟みとなり愈々加盟することとなれり。

○聯盟加入國は、ノールウエー、スウエデン、ポーランド、ルーマニア、スウイス、チエッコスロバキヤ、米國、カナダ、フインランド、佛國、伊太利、墺國、ユーゴースロバキヤ、ドイツ、ハンガリー、日本なり。

○レルヒ氏同情金に對し聯盟は金十五圓寄贈せり。

○聯盟競技事務所變更　札幌市北五條西十一丁目二番地

寄贈圖書

三高山岳部報告　第四號　第三高等學校
雪のさゝやき　第四卷　六甲スキー倶樂部
ペデスツリアン　八四號　神戸徒歩會

H. U. S. V. 新着圖書

山岳　第二〇年第一號　大日本山岳會

今度の山岳は秩父を一括して田島、神谷、竹田氏等が詳說して居られます。

編輯後記

もう秋の聲を聞くことになつた。一日といふ二四時間の過ぎ行く歩の速さには、本當に驚く。やがて一千時間もしたら、もう北海道には雪が降つて來るんだ。さて冬の仕度もせねばなるまいか。

友と入れ代りに札幌での留守番、涼しいから未だ良いものの、暑くつちややりきれたものでない。

今月號には例の大島君の非常な御好意による熱心なる專門的御研究の續稿を以て、本誌を飾ることが出來ました。此度のはエミール・ジャヴェルに關してのものであります。內容文に佛語が盛んに出て居ります。校正は嚴密に致しましたが、遺憾なこと二つ、一つは印刷屋に佛文活字が全部持合せて居らぬこと。もう一つは吾等の佛語に對する智識の貧弱なること。筆者並びに讀者諸君何卒了とせられたし。

此三月學士樣になつて悠々目下故山に自適迫らざる生活にある赤松兄から小さい想ひ出でを寄せられました。感謝します。

本塲のアルペンで、現代式のアルペンスキーテクニックを修練されたる麻生君から、アルペンスキーテクニックの二、三に關しての玉稿を亦御紹介致しました。なか〳〵得るところがあります。

例のスキーテクニック欄には、今度本田君が Wunder d. Schneeschuh's 中のシュリット、シュウ、ラウフを譯してくれました。所謂シュリット、シュウ、ラウフの方法も之で解せらるゝと思ひます。（君）

誤植訂正

	誤	正
第六十二號		
七頁右より十一行目	だつつ廣い	だだつ廣い
二五頁上段三行目	Kennen	Rennen
同　下段五行目	Winter	Winter
スキーテクニックの研究		
三頁上より八行目	不安で	不必要で
同　十一行目	危險性を慎重云々	危險性を輕視すべきでないそして慎重の………
六頁下より七行目	純綽	純粹
第六十三號		
二頁本文二行目	Norman-Nerüde	Norman-Neruda
同　左から四行目	一八八〇年に	一八八〇年代に
六頁右から四行目	八年三日より	八月三日より
一一頁右から十二行目	グローマンシュヒツシェ	グローマンシュヒッツヒ
一六頁右から八行目	Bergfahrten	Bergfahrten
二一頁上段左から二行目	見立した	見出した
二四頁上段左から六行目	於げる	於ける
同　下段左から六行目	冬季にがらう	冬季にからう
スキーテクニックの研究		
二頁上より五行目	スキー	スキー
同　下より二行目	滑際	滑降
三頁上より十行目	貪しい	貧しい

ず平地に於ても行ひ得る。然しそれは非常に努力を要する。そして而も永く續け得ぬものである。之のスケート式滑走を、常に平地に於て練習する必要がある。之は力强き押しつけ（Abstossen）を覺へるに非常に良い練習になるから。

然し之のスケート式滑走は亦、直滑降の場合の Stand Sicherheit(安定姿勢）をしつかり會得するためには非常に良い練習になるから、むしろ全く平面な所よりも少し變化のある斜面に於て練習するのもよろしからうと考へらる。

(Wunder d. Schneeschuhs)　　— 1926. 7. 17 —

一方のスキーの内側カンテで押しつける力は、出來る丈け力强くなければならぬ。而て一方のスキーによつて生ずる前進辷り出しの力を出來る丈け利用せねばならぬ。すれば大きく身構へられた、歩調の廣い運動が成立される。

体重はずつと前方にかける。然し Schussfahren に於ける時の樣に、あまり前方にかゝつても不可ない。むしろ、体は心持ち少し背位（うしろにかゝる）位の氣持ちになる方が良い。例へば一方のスキーで辷つて居る時、前進力の止る時にも尙前方への衝動を與ふ可き、均衡を得る樣に。

歩調が大きければ大きい程、之の背位（Rücklage）のモーメントを明かにする必要がある。

スケート式滑走の場合に、殆ど凡ての場合に於てスキーの前方よりは後部の方に、より多く荷重されて居るものである。

決してスケート式滑走の場合に、膝關節をスタイフ（强直）にしては不可ない。即ち膝をカタクしては不可ない。歩調が大きい程、膝關節の屈折をグツト深く曲げて、体重をひくゝ下げる。

全体重のかゝつて居る前行のスキーは、勿論完全に水平でなければならぬ。丁度 Schussfahren に於けると同樣に決してカンテン（角附け）しては不可ない。

若し一方のスキーで滑走を續けて居る場合に、何か雪の狀態によつて、例へばスキーがカンテンした時とか、雪面が突然に破れて陷沒した時等の場合に、滑走が停止せんとせる場合には、決して尙長くそのまゝの狀態で滑走をつゞけ樣と云ふ風な氣を起しては不可ない。却へつて直ちに前進的衝動を他のスキーに移行して体重を他方のスキーに素早くうつし、即ち他側外方に体を投げ出す樣にする。これに依つて轉倒する事なしに故障を生ぜる方のスキーを、直ちに空中に浮ばせる事が出來る。

之のスケート式滑走は普通は緩き斜面に於て行はれる。多くは速度を增す爲めか、又は之の美しい滑走を單に樂むと云ふ純な心から行はれるものである。

靜かにそして確かに行はれるスケート式滑走は、而もそれが特に歩調を大きくして、美しく辷るのを見ると、一目してその人は、上手なゲレンデロイフエル（Gelände-läufer）だとわかる。

若し雪の狀態が良くて、非常になめらかで、辷りやすい時は、單に斜面に限ら

スキーテクニツクの研究

スケート式滑走術

"Das Schlittschuhlaufen"

本田治吉譯

スキー滑走の凡ての動作の中、最も美しく且つ同時に最も必要な運動は、スキーのスケート式滑走である。

之の滑走も矢張り、氷上スケート滑走と同じく、あゝした樣なグルンドに於て行われるものである。

滑走方法

先づ第一に一方のスキーの内側のカンテ(稜)を以て、雪面を出來る丈け強く押しつける。(Abstossen するとある)而て同時に、その押した力によつてその時生じた前方へ向つての前進衝動を利用して、他側のスキーにて前方に滑り出すのである、そして第二のスキーは、斜め外方に向つて前進する。その時その第二のスキーを出來る丈け長時間、而も出來る丈け廣く(歩調)滑らす樣に注意する。且つその間に他方のスキー、即ち先きにスキーを押しつけたスキー(即ち今では後に殘れるスキー)を空中に浮かし、出來る丈け前行せる足に近かく引寄せる。從つてそのスキーは、前進せるスキーと共に前方に運ばれる理である。

次には之のスキーを前と反對の側に、斜めに、そして外方に向つて、雪面に据定する。之の瞬間に於て走者は、今迄辷つて居たスキーに体重を掛けて居たのを次には第二の前進スキーの足に、素早く移動せしむ可きである。そして之の新たに体重をかけた足のスキーで外方に辷り出すのである。而も之の体重抜く方のスキーで一度雪面を押しつけて、同時にスキーを空中に浮かせて、素早く辷り出した足に引きよせる可き事は、第一動に於けると同樣な理論である。

此のスケート式滑走をなす場合に、特に次の事に注意する必要がある。

今夏各地御旅行の御一端
の程何なりと御頒ち下さ
らんことを切に希望して
居ります。

札幌　山とスキーの會編輯部

スキー並附屬品
製作販賣

••(呈カタログ)••

札幌

小谷運動具店

電話一五六八番
振替七九六四番

優秀なるレコードは
優秀なるスキーに依る!!

斯界第一
大量製産

ツバメ印スキー

全國有名店に有り

製造元
札幌市
中野商店
スキー部

豫約募集

北大スキー部創立十五周年記念出版

我が北大スキー部が北國の天地に我國最初にスキー術を輸入してより今年で十五周年を迎へることになりました。私どもの先輩が瑞西から來られた、コーラー先生により初めてスキーを見て此を札幌の馬橇屋に作らし、海外諸國の書籍を渉獵して一意研究に心を碎いてより十五年、一般スキー術は勿論或は四季の登山に、或は競技的方面の草分けに絶えざる努力の跡を刻みつけて來ました。

此等先輩の苦心の集積が今日のスキー部の盛大を致した過去を顧みて、ここに記念的出版を敢て企てた樣な次第であります。私どもは山岳及びスキーに熱情を持たるる諸君の御一讀下さることを望んで居ります。

記念出版内容大項

一青山温泉附近の連山　平塚直秀
一北海道西海岸の增毛山彙について　佐々木政吉
一吹雪と雪庇の研究　パウルケ述
一スキー部歴史　岩森秀夫譯
一想片　小川玄一
一同　二木春松
一青山温泉の憶出　大島幸吉
一スキーセイリングの興味　栃内吉彦
　松川五郎

一高山疾病に就て　本田治吉
一想片　並河功
一大正二年冬の富士スキー登山の憶出　角倉邦彦
一想片　大井上義精
一同　大野田成三
一スキージャムピング用スキー製作に關する考察　廣田七郎
一スキー部創立當時の回顧　稲田昌植

一初心者及び熟練者に與ふるスキージャムヒング練習要綱　ドクトル・パアデル述　廣田戸七郎譯
一デイスタンスレースの練習法　岡村源太郎
一冬季登山中のステップカッテングについて(Stufen-Schlagen)　ヨセフ・エトリンゲル述　田口鎮雄譯
一五月のオプタテシケ山脈　山口健兒
一知床半島の山々　須藤宜之助
一紀行(武利岳)　西川櫻
一同(三月の槍、穂高行)　和辻廣樹
一夏スキーと其利用についての研究　廣田戸七郎
一ターンの支配する素因についての概念　中野誠一
一スキーによる負傷について　本田治吉
一本邦スキージャムヒング創始時代の研究の憶出　大矢敏範
一スキー滑走に於ける二要素に就て　岡村源太郎
一陽光の積雪に及ぼす影響の理論的研究　加納一郎
一ランディングテクニックの研究　伴素彦
一トレエーケホップと所謂グレンデシュプルングとに關する研究　廣田戸七郎
一考慮せられたきスキージャムヒングの將來　廣田戸七郎
一「板さん」—亡友板倉勝宜君の憶ひ出で　板橋敬一
一石狩平原の二日間　六鹿一彦
一新設記念ヒュッテ及指峰臺に就て　佐々木政吉
一雪中運動中の應急療法について　本田治吉
一改造せる我が固定飛躍丘について　青木信三・伊久秀春
一手稲山を中心としてのグレンデスキー　松川五郎
一其頃　廣田戸七郎
一過古六年間を顧みて　赤松動
一スキー競走のテクニック　ドクトル・パアデル述　岡村源太郎譯
一海外よりの寄稿豫定　木原均　松方三郎　麻生武治
一海外スキー家よりの通信
一譯詩、譯章、挿畫、その他

◇體裁　菊版、全部ポイント活字組
紙質上等、寫眞版約二十葉、全頁約三百頁
◇價格はすべて實費でお頒ちしたいと思つて居りますから、印刷の上でなくては確定致しませんけれども、概算豫定額は一部二圓五十錢送料十二錢であります。
◇刊行期日　十一月下旬
◇豫約申込期日　十月廿日まで
尚豫約希望のお方は右の期日までに概算豫定額及び送料を添へて左記まで御申込下さい。

札幌市北五條西十一丁目二番地（山とスキーの會内）
北大スキー部記念出版係
振替小樽八四九五

優秀ナルスキート其用具

小樽

梅屋運動具店

◇ 賜御用命 ◇

竹田宮・北白川宮・山階宮各宮殿下

カナデアンロッキー登山隊御一行
の御歸朝後弊店に賜へる證狀

靴ハ登山用品中最モ大切ナモノヽ一デアリマス。岩石氷雪又ハ水中激シク使用シテ而モ何等登山者ニ不安ヲ與ヘヌ丈ケノ物ヲ絶對ニ必要トシマス。此ノ度「ロッキー」登山ニ際シ一行ノ使用シタ靴ハ山崎君ノ作製ニカヽルモノデ殆ンド完全ニ近イ好成績ヲ擧ゲテ井マス。形ニ於テ縫ヒ方ニ於テ靴ノ打方ニ於テ其他防水ノ點ヤ强サノ點ニ於テ凡テ平均シタ立派ナ出來榮デシタ。出發前ニ最モ恐レタコトハ靴ノ不完全ナル場合ヲ考ヘタコトデシタ。併シ此ノ不安ナク登山ヲ出來タコトハ同君ノ賜物ト感謝シ且ツ今後モ益々御奮勵英國ノ「カーター」ヤ瑞西ノ「アマハー」ニ優ルヤウナ物ヲ作製セラルヽヤウニ期待止シテミマセン。

大正十四年十月二十一日

有恒
槇
橋本靜一
岡部長量
波多野正信
三田幸夫
早川種三

山崎靴店殿

登山靴とスキー靴

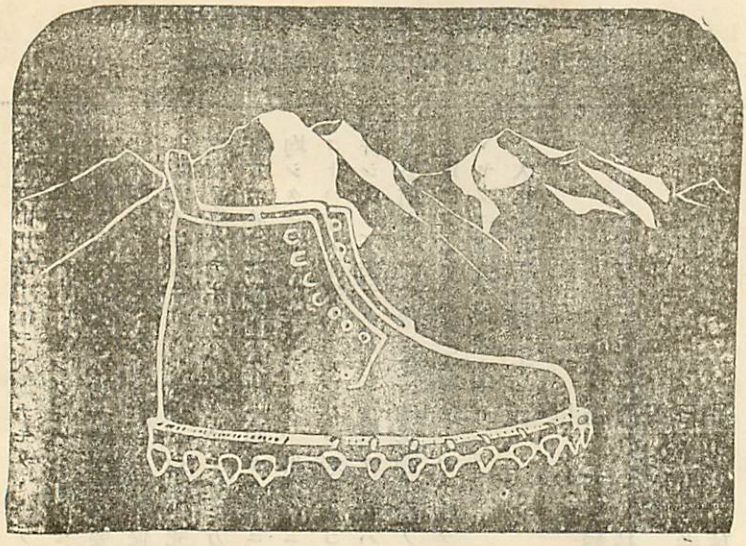
— 呈贈グロタカ —

慶應山岳部御用

山崎靴店

東京四谷大横町角

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ
一等賞金牌受領



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角
太田屋靴店
電話小石川四七一二番
振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C. G. S. 系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定價 金參拾錢

＊前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十五年 八月廿八日 印刷
大正十五年 九月一日 發行
（毎月一回一日發行）

編輯者 山口健兒
印刷兼發行者 廣田戸七郎
印刷所 札幌印刷株式會社
北海道札幌市北一條西二丁目
發行所 山とスキーの會
北海道札幌市北五條西十一丁目二番地
振替口座小樽八四九五番

Le Gezeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 64. Septembro 1926. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十五年八月廿八日印刷納本
大正十五年九月一日發行

山とスキー 第六十四號

定價參拾錢

美満津のウォンタースポーツ用具

合名會社
美満津商店
東京、本郷、赤門前
電話（小石川）四八五、二〇七一